

## 彦根 延代 [彦根延代賞]

飛田 正浩

飛田さんが今回のフェアで出品した作品は、自分が今着ている服（もしくは持参した服）にアーティストが直接現場でプリントをし、そのメッセージを共有して成立する作品です。コロナ禍の只中のフェア開催ということで、例年とは違い、緊張が極限まで達した状態で迎えた初日。飛田さんにその日着ていたジャケットの右肩の後ろに、シルクスクリーンでプリントして下さったのは「表現の自由」という言葉と、可愛らしいお花のマーク。使用されたフォントも柔らかくボップで、強い言葉にも関わらず、全くもって押しつけがましくなく、ソフトな印象。プリントを纏った瞬間、右肩にずりりとこの言葉の責任の重さが乗った感覚と、背筋にはびしりと芯が通った感覚がしました。その後フェアの会期が進むにつれて、プリントのデザインが醸す柔らかい雰囲気のように、日に日に気持ちも右肩も軽やかになっていきました。不思議です。きっと会期中に多くの作家さんや来場者の方から激励の言葉をいただき、「フェアの開催は間違いじゃなかったんだ」と、確信に近い感情が生まれてきていたからなのかもしれません。

後日飛田さんから「あなたへのプリントが（アートフェアの）スタッフ内に火を付けましたね。」という言葉を頂きました。いえいえ、飛田さんが私自身に火をつけて下さり、自分も飛田さんの作品の一部になって、飛田さんが纏って下さった言葉とともに5日間の会期を全うすることができました。・・・今回は、そのような極めてパーソナルな思いで、プライズを選ばせて頂きました。

## 風澤 俊一 [風澤俊一賞]

O JUN

## 藤谷 けい [藤谷けい賞]

飛田 正浩

飛田さんが主宰する spoken words project のお洋服は、まだ私が20代の頃、幼馴染が勤めていた渋谷にあるDesperadoというセレクトショップに通いつめていた頃から知っていました。可愛いだけではなく、その中にパンクと自由さを感じるそのブランド精神をどこかに感じているから、年齢を重ねた今も着続けています。今回このような事態になってしまい開催さえ危ぶまれた時に、事務局スタッフとして飛田さんとメールでやりとりさせていただいた中で「こんな時にアートはどうしたら良いのでしょうか」という問い合わせをいただき、その一つの回答（態度）となるようなアートフェアを目指し、開催までなんとか漕ぎつけたような気がしています。作品を制作してもらうにあたり、スポーツとの出会いの場所Desperadoで何年も前に購入したボロボロのシャツをお渡しし、そこに極めて個人的な会話がプラスされ、「愛が尽きた」と入れていただきました。そして「この作品を更新してください」とのコメントも。この奮い立たせるような言葉のチョイスも含め、やはり言葉と会話するパンクな方だなと思いました。

## 船山 雅史 [船山賞]

須永 有

既成の支持体でなくうねる鉄板を大胆に使うことで視点を移動すると絵の違う面が見える。力強さを感じる。

## 前川 俊作 [前川俊作賞]

南谷 理加 (Bambinart Gallery)

南谷さんの作品は初見で惹かれました。ただ、どこが良いと言語化するのが難しい。細かく言えばシュールな構図、とか自然と人間にヒエラルキーを感じさせない、などと指摘することはできますが、その魅力を言い当てていると思えない。言い換えればずっと見られる。つまり良い絵だと思います。

## 丸山 晶崇 [ミュージアムショップ・ティ 賞]

後藤 有美

## 三沢 恵子 [アートエバンジェリスト協会賞]

小川 武

生い茂る植物に囲まれているアーティストの仕事場の匂いが想像できる。呼吸する生命。作品は物質で、色みはない。ある意味、日常の記録の延長として生み出されたマテリアルなものだとしても、確実にそこに生命はある。コーススのように、ユッカと作品と言葉を並べて飾ってみようか。作品に向か合ったとき、ギャラリーのようにひっそりと、或いは温室のようにしっかりと、空間は息づく。

## 都橋 はる美 [都橋はる美賞]

上村 菜々子

これから何かが始まりそうな足先に惹かれました。こんな時だからこそ軽やかなステップで。

## 森下 泰輔 [アートラボで賞]

Houxo Que (Gallery OUT of PLACE)

Houxo Que は、液晶モニターと螢光アクリル絵具を用い、現代の表象関係とイメージ環境それ自体を主題にしている。昨年、京橋の戸建建設ビルで開催された展示では、地下に水槽を作り LED ビームで周期的に色彩を変化させていた。ミニマリズムと情報環境、あるいは絵画論の延長線上において現時点の表現として優れている。

## 山本 謙一 [アウラ賞]

開藤 菜々子

束芋 (Gallery KIDO Press)

やなぎさわ ひろ

建築家として素直な日常空間への気持ちから、今回の AURA( アウラ ) 賞は直感的に、こんな作品が日常空間にあれば飾りやすくていいだろうというそんなイメージで選ばせていただきました。

## リンダ・デニス [デニス アワード]

池田 嘉人

飛田 正浩

堀 聖史

## 匿名 [01 賞]

上野 裕二郎

上野裕二郎の作品では、動物や鳥が荒々しいタッチで、まるでほどけて周囲の空間に溶けていくように描かれている。生物は日々飲み食いし排泄し続ける。私たちは日々新たな情報を触れ、そのほとんどを忘却していく。生物を構成する要素は常に流动していくのに、私たちはどうして完結した個体でいられるのだろうか。私という意識をここに繋ぎ止めているのは何なのか。考えれば不思議なことである。この作品はこうした動的平衡にある生物のあり様を、改めて気付かせてくれるようと思えるのだ。